タックルの発生と成立（モールの研究と対策）

競技規則 15 条 2 項を見てみましょう。

日本語文

15.2　タックルが発生しない場合

ボールキャリアーが相手側プレーヤーのひとりによって捕らえられ、味方のプレーヤーがそのボールキャリアーにバインドする場合、モールが形成されたことになり、タックルが発生したとはみなさない。

英文

15.2　WHEN A TACKLE CANNOT TAKE PLACE

When the ball carrier is held by one opponent and a team mate binds on to that ball carrier, a maul has been formed and a tackle cannot take place.

最後の部分は、

When・・・a tackle cannot take place.　発生する　take place　に注目しましょう。

15 条タックルの定義の第 1 章

ボールキャリヤーが、一人または複数の相手プレーヤーに捕まり地面に倒された場合にタックルは成立する。

A tackle occurs when・・・と occur に注目しましょう。発生と成立が全く同時であった時代（ラグビー創生期）から、分離して考える今日までの過程は興味深いものです。

tackle は、seize and stop 捕まえて止めるという意味の英語がラグビー用語になったものです。捕まってプレー（パス）できなければ、ボールを放すことによってプレーが継続するように設定されています。スポーツを楽しむ方法としての工夫の意識が常識として定着し、紳士らしく戦う条件として守られてきました。時に倒れることがあっても、is brought to ground は問題でなかったのです。

捕まえられる状態が発生したときに、当時のタックルは成立していたのです。タックルは立ったままで成立し、全てのプレーヤーがスポーツマンシップとして共通認識していたことが、捕まってもがむしゃらに動き回ることが多くなり、倒れるまで動き回る相手に対し、倒してしまうことが防御の完結と考えられるようになりました。

そして重要なことがあります。タックルで止めるのは相手の前進であって、ゲームの進行ではないということです。根本的に「タックルが競技停止の原因になることがない」ことは、ルールの原理原則として不変のもので重要なことです。プレーが変遷する中で、その為のルールの改正が繰り返されてきました。しかし、ラグビーのグローバル化とともに、タックルに係わる根本的なことが的確に伝承されなかったために、常識であったことが無視され通用しなくなったのが現状です。

モールは、ボールを持っているプレーヤーが、相手側の一人またはそれ以上のプレーヤーに捕らえられ、ボールキャリヤーの味方一人またはそれ以上のプレーヤーがボールキャリヤーにバインドしているときに発生する occur。そして、参加するプレーヤーは頭と肩を腰より低くしてはならない（この項削除）。低い姿勢で相手を捕まえ押し返し、引き倒す防御が認められるようになりました。ルールは戦い方と同時に楽しみ方そして勝ち方を示しているものです。ラックモールもプレーの継続のしかたを教えているのです。継続プレーとしてモールを立ってするプレーとして勧めています。実戦では防御法がないというルールの空白をのこしながらやってきましたのが改正されました。当初考えられていたモール状態で、手中ボールを地面に落とすハンドリングラックの研究が進むことでしょう。

モールが成立すると、相手側が倒れないように支えるだけという説明のつかないプレーしか許されなかった不合理が改正され、低い姿勢で相手を止めさらにはスマザータックルのように引き倒すことがゆるされるようになりました。モールが simpler で easier になったということです。

ゲームが単純で容易即ち内容が単純で、プレーするにもレフリングするにも簡単容易であるために、進行過程を分解してプレー（動作）を一つ一つ順に取り上げて整理してみましょう。

1. まずボールを放す

身体に接触するような放し方では、プレー継続が不可能ですから放したとは言えません。相手に取られるのを防ぐために腕でボールを覆うようにするのも放さないとみなすべきです。サポーターがいないからではなくパスをする意識が低いからパスをしないとみられる場合は未熟で経験不足と済ましてしまってはいけません。ボールを置くのは身体の相手側

にも認められている事を知らないプレーヤーがいます。腕を伸ばしてボールを動かすことによって身体から離れてプレーし易くすることによって、所謂ラックによってボールが中途停滞することなくスピーディに展開できるのです。

2. ボールから離れる
ルールとしては分かっていてもなかなかできないことであったが、的確に置くことがボールから離れる条件を半ば満たされるようになりました。ボールを放したプレーヤーの上に重なるようにしてボールを確保しようとする動きは反則です。

3. 立ちあがる
倒れている上に重なり乗ってくるから立ち上がれないというのが現状です。タック成立したら身を挺して（ボールの上に重なって倒れこんで）ボールを確保することが重要且つ必要な行為として教えられ必死で実行しているのです。2 番手 3 番手がボールを拾い上げ前進できる状態であるのに倒れ込むのが見られるのは残念なことです。

以上の 3 点が反省され矯正されたらゲームは間違いなく継続します。そのためには、指導者の反省と研究が先決問題で厳正に教えることが第一です。

プレーヤーが実行してもレフリーが的確な判断をしなければプレーヤーは仕方なく旧来の方法に戻ってしまうでしょう。レフリーはボールを放さない場合は厳密に判断し笛を吹下かるばなりません。タックルの成立後 unplayable になる場合の 90% は上記のボールを放さない場合にあたります。厳正に笛を吹かないことが不正を助長し、simple and easy であることから遠ざかり、やたらと当り合いの激しいだけのつまらないゲームに なってしまうのです。

レフリングについてもう一つ重要な問題があります。数年検討を重ねてこの度の改正となりました。改正の目的はラグビーを simpler にそして easier なるものにすることによって面白い楽しいものになることです。その目的達成ために、タックル以前の重要な問題があります。それはスクラムの最後尾の線より 5m 後方に設定されるオフサイドラインです。前進したかどうかを決めるのは、ボールが元にあった線より前か（ゲインした）後ろかということが根本原則ですが、実戦ではボールを獲得して攻撃する側がその線より後方でタックルされる場合が多く、少しでも前で攻撃の芽を摘むことが要領と考えられるようになりました。それは equal condition に反するものであり、面白くありません。レフリーは改正の目的が達成されるように、防御側がオフサイドライン後方で待機しフライングのないことをしっかり確かめなければなりませんし、そのための位置取りも工夫が大切です。

2008.06.08
西川　義行